



Title	朱天心の《古都》における記憶と忘却：パリンプセスト、消去、在地性批判
Author(s)	呉, 穎濤
Citation	アジア太平洋論叢. 2021, 23, p. 3-20
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95065
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

朱天心の《古都》における記憶と忘却 —パリンプセスト、消去、在地性批判—

Memory and Forgetting in Chu Tien-hsin's "The Old Capital" Palimpsest, Erasure, and a Place-based Critique

呉 穎濤*

NG Richard Wing To

Abstract

This essay addresses the problem of memory and forgetting in Chu Tien-hsin's novella "The Old Capital." In "The Old Capital," the heroine called "you" is a second-generation mainlander in Taiwan. With the transition of power from mainlander government to inlander government, the heroine has to face the problem of erasure of memory due to the political manipulation in the name of "localization" by the inlander government.

This essay reads the heroine's status of existence illustrated in "The Old Capital" by using the critique of place-basedness, a key concept in Sinophone studies. Place-basedness refers to the complex but unique history of Taiwan as a place that allows pluralistic imagination of its inhabitants. By showing both the cultural and political sides of the heroine's peculiar status of existence in Taipei, which is as a minor within the periphery of the greater China, this essay aims to shed light on the tactics of historical narrative of individuals who cannot be identified by relatively stable concepts based on the discourse of "Chineseness," such as nationalism and languages, thereby providing insight, namely tactics of political intervention of memory and identity formation, into understanding of minor Sinophone literatures.

Keywords: Chu Tien-hsin, Memory, Mainlander, Taipei, Sinophone, place-basedness

I はじめに

ここ数年、台湾の政治指導者はかつての統治者のやり方に倣って、政治の力を動員して歴史を語ろうとし、それどころか歴史を作り変えようとさえしています。蔣家の国民党時代には、日本統治期に残された有形無形のあらゆる歴史遺産をほとんど洗い流してしまいました。李登輝時代も、同様の手法で、およそ中国に関わる事柄を、良いものも悪いものも、

「本土化」の名のもとに、何もかもいっしょに歴史のゴミ箱に掃き捨て、かくしていわゆる台湾意識なるものが誕生したのです——しかし、もしも一つの主体意識の確立に、再三にわたる記憶の洗い流しが必要だというなら、栄光、恥辱、喜び、悲しみといった、かつてほんとうに存在したものが消し去られた後に、果たして何が残るのでしょうか？

仮に一つの都市の有形無形の記憶の流失が、様々な天災や資本主義の高度発展によって引き起こされるのであれば、わたしも特に言うことはありません。それは単にどの時代にも、どの誰にでも必然的に訪れる、過去や失われしものへのノスタルジーであり、大げさに書きたてるほどのことではないでしょう。でも、もしも政治の強い介入によって、一つの都市どころか一つの時代までもが記憶喪失に陥るのだとしたら、かつてこの眼でそれを目撃し、記憶

* 大阪大学大学院言語文化研究科・博士後期課程

に留めてきた一人の人間として、わたしは決してそれを黙って見過ごすわけにはいかないのです。

ここに引いたのは小説集『古都』の日本語版刊行にあたって、朱天心が記した小説の冒頭部分の一部である⁽¹⁾。作家の背景について、父は中国山東省出身で 1949 年に国民党軍と共に台湾にやってきた朱西寧、母は台湾人で日本文学翻訳家の劉慕沙である。朱天心（1958－）は台北にある眷村——外省人の軍人の公務員宿舍街——で育った。彼女のような台湾外省人やその第二世代は、本来属していた土地や共同体を、政治的、歴史的な理由で離れ台湾へやってきたため、数世代にわたって台湾に暮らしている台湾本省人や先住民と比べ生活経験や身分に対する認識において大きな違いが見られる。朱天心は外省人として、上記引用で述べられているように、歴史構築への政治的介入により人々が集団的に「記憶喪失に陥る」ことに対する危機意識から、小説《古都》を執筆した⁽²⁾。

朱天心の《古都》は、外省人第二世代であるヒロイン「あなた」が台北と京都で都市探索をする物語である。既婚女性である「あなた」は、同じく既婚女性でアメリカに移住した昔の同性愛の相手 A の連絡を受け京都で会うことになる。「あなた」は京都へ行き一人で街を散策しながら A の現在の様子について想像していたが、結局 A は最後まで現れることはなかった。

「あなた」は台湾に戻った後、かつて日本植民地時代に日本政府によって都市計画がなされた台北で、その痕跡や古い街並みをもう一度たどろうと試みるが、台北における「あなた」の昔の記憶の中の面影を留めた風景や建物が多く消失していることに気づき、「あなた」は迷子になったかのようにさまよい歩く。最後の引用の前に、物語は「あなた」の喪失感で終わる。

「ここはどこ？ ……あなたは声を上げて泣いた。」

蔡建鑫 (Tsai Chien-Hsin) (2012: 143) は、「《古都》は古代中国文学の『桃花源記』(陶淵明)や近代日本文学(川端康成)の引用、虚構と史料の絡み合い、現実と想像力の重ね合わせなどの理由から、現代台湾の最も難しい物語の一つである」と指摘している。本稿では、まさにその朱天心の小説《古都》における重ね合わせの部分の引用、虚構と史料などの要素を整理し、物語を読み解いていくことを試みる。

清水賢一郎が「記憶の書」と名づけたこの物語は、台湾外省人第二世代である著者の「記憶」と「出身＝身分 (アイデンティティ)」に関する問いを考えさせてくれる (清水 2000: 315)。イタリアの詩人 I.V. フォスカリーニ (I.V. Foscari) の言葉を直接引用した後、物語は語り手の問いかけから始まる。「まさか、あなたの記憶が何の意味もないなんて……」⁽³⁾ この問いかけは、「あなた」の記憶は一体どのような形であれば意味を得ることができるのか、そしてその重要な記憶はなぜ顧みられることなく過去のものとなってしまったのかということについて興味深い疑問をもたらす。これらのことに加え、そもそも自分が属していない土地への記憶に対する想像や描写は、世界を漂流し、そこに固有の意味を見出す華人に対するサイノフォン研究 (Sinophone Studies) という視点から見て重要な意義を持っている。

サイノフォン研究とは、現代中国文学研究が「中華人民共和国を中心としたもの」であるという従来の前提を無効にし、「華語」を結節点として、世界規模での中国語圏文学の創造に横断的なアプローチをとるという考え方である。代表的な研究の方向性には次の三つがある。

- (一) 反ディアスポラ (anti-diaspora) : 異なる地域の特殊性に注目して異なる「華語」のコミュニティの言語、歴史、経験の相違性を考察すること (史 2017: 9-19)。
- (二) 華夷風 : 国家への想像のコンプレックス、オーソドックスな文章への崇拝、文学と

歴史のマスター・ナラティブに対する「華語」作家の反応とその共鳴に注目して考察すること（王 2015：2）。

(三) 文学的ガバナンス (literary governance) : ディアスポラチャイニーズの文化表象を、グローバルとローカルの間の言語資本を形成する物質的・歴史的プロセスによって生み出されたフィールド、つまり「不安定な文学的同盟、限られた資源、移り変わる言語的忠誠心の多中心的ネットワーク」として考察すること (Tsu 2011：13)。

朱天心はこの三つの点に照らして、まさしくサイノフォン研究の重要な考察対象だといえる。出身からみると、朱は中国大陆のルーツを持つ中国人であると同時に、完全な中国人ではない。台湾で生まれ育った台湾人であると同時に、完全な台湾人でもない。日本植民地的な制度や文化の中でも生きているが、もちろん日本人でもない。朱はいわゆる台湾外省人第二世代であり、中国大陆、台湾、日本の境界に身を置いた。《古都》の冒頭での「まさか、あなたの記憶が何の意味もないなんて……」という設問はまさに台湾外省人第二世代としての朱天心の最も深刻な状況を示している。つまり、どこにも属していない人々はいったいいかなる方法で身分（アイデンティティ）と彼らの独特な記憶を表現することができるのだろうか。そして、このような明確な共同体に属していない人々は、いかにして自らの記憶が消失する、つまり忘却されるという脅威に対処していくことができるのだろうか。本稿では、《古都》の中に現れる中国大陆、台湾、日本という三つの地域の周縁に身を置いた台湾外省人第二世代の記憶と忘却を示唆する記述を分析するとともに、その記憶と忘却が表す存在様式を明らかにすることを試みる。

II 先行研究

1. 語りの技法に注目する研究

ここではまず《古都》の語りの技法に関する研究状況について述べておこう。《古都》の難解さを読み解く上でまず注目したいのが、《古都》の語りをめぐる分析の多さである。本稿での焦点は、アイデンティティ及び記憶と忘却にあるので、主に次の二つの視点から先行研究の分析を確認しておこう。

第一の視点は、物語における引用と間テクスト性に関わっている。楊如英 (1998) は、物語では、多層の間テクスト性を通してポストコロニアルの歴史の観点から集団に対する個人的反応と思考を提示していると指摘しているが、カレン・ソーンバー (Karen Thornber) (2014：466) はさらに、朱天心《古都》で幾度も引用される川端康成の『古都』において、女性が異なる家族のはざまに在ることに対し、朱天心の《古都》ではそれぞれ異なる文化のはざまに在る女性のイメージを示していると指摘している。後述するように、「はざま」に在る女性のイメージや記憶や忘却に対してそれらが持つ役割に着目するものである。

第二の視点は、二人称の語り方の利用とその意図に関わっている。二人称の語り方に着目する研究の中では、ヒロインと作者と読者の関係性、記憶を表現するために二人称が用いられているといった指摘があり、これらの視点が物語を読み解く上で有用であると考えられる。濱田麻矢は記憶の客観性の観点から二人称の語りを次のように分析している (濱田 2009：165)。

「あなた」という二人称の語りは、間違いなく読者をテキストに誘い込むための装置となる。同時に、読者は「あなた」を「あなた」にした、目に見えない「私」（語り手＝作者）

の存在を意識せずにはいられない。また、A との記憶は、読者とは全く関係のない物語である閉ざされた円の中に描かれた「女主人公＝語り手」の主観的で絶対的な記憶となる。〔中略〕二人称「あなた」の選択は、落ち着いた距離感で「あなた」の雰囲気に取り添い、「あなた」を見つめる語り手の「私」が見事に隠されており、読者を「あなた」の記憶の世界へと引き込んでいく。

これらの二人称の語りには、二人称の機能と物語の二重性を見出すことができる。仮に作者を語り手として読むとき、読者が物語に加わる可能性が見え、ヒロイン「あなた」を語り手として読むとき、A との記憶を忠実に表現できるようになるという、物語の叙述における二重の構造が見えてくる。しかしながら、「あなた」の話を語る人「わたし」と「あなた」の具体的な関係性とその相互への影響はまだ明らかになっていない。この点については、本稿で後ほど論ずることにする。

2. 個人記憶に注目する研究

さて本稿で焦点を当てようとする記憶と忘却に関しても、とりわけ「個人記憶」の重要性についていくつかの先行研究が論じている。星野幸代は「ヒロインの記憶の中で、少女時代、青春時代、また妻、小学生の母親となるまで、存在していた自分を保証するものは全て愛惜すべきものである」と述べている（星野 2002：98）。黄英哲は、個人の記憶が持つ意義に着目し、《古都》という物語において、ヒロインである「あなた」自身の個人記憶を用いて歴史記憶と並べて見ることで「あなた」の特別なアイデンティティを語っていると論じ、作中の「あなた」が物語を通じて自分のアイデンティティを探すと同時に、歴史のディスコースによって形成されたアイデンティティを探すことの無意味さに気づいている、と指摘している（黄 2005：50）。

個々の地域に住んでいる人々にはそれぞれに固有の生活経験があり、そのような生活経験がそれぞれの地域に住む人々のアイデンティティを形成している。個々の人物の生活体験に深く結びつく個人の記憶は客観的事実に基づく歴史記憶と全く関係がないわけではなく、重なっている部分やある程度の繋がりがあるが、それぞれ分けて個別に比較することで、自らのアイデンティティ形成との関係性を明らかにすることができるようになる。しかしながら、個人記憶というものは曖昧であったり、不確かであったり、「思い込み」である面も多い。加えて、個人記憶は時間が経つにつれて徐々に忘れられていくことも大きな特徴である。歴史記憶にならなければ、個人記憶はそれが存在した事実が残るのみで後はほとんどが忘れ去られてしまう。黄英哲も朱天心について、「彼女は外省人と本省人が混在する社会状況の中で、一貫してディスコースを通じて台湾のアイデンティティを問い続けており、そのディスコースには、歴史への危機感がはっきり表れている」（Ibid.：29）と指摘しているが、そのような危機意識は基本的に出口がない。そうすると、《古都》における個人記憶とそれが忘れ去られる過程を書くことの持つ意義とはなんだろうか。

Ⅲ 記憶と忘却について

1. 「あなた」と「わたし」

物語のヒロイン「あなた」は、アメリカに移住した昔の同性愛の相手 A から連絡を受け京都で会うことになる。A の現在の様子を知らない「あなた」は、同じく京都と、女性どうしの親密

な関係を主題とする川端康成の小説『古都』を読みながら一人で京都の街を散策し、現在の A を想像するが、結局 A は最後まで現れることはなかった。「あなた」は台北に戻った後、日本植民地時代に日本政府によって都市計画がなされた台北で、その痕跡や古い街並みをもう一度たどろうと試みる。そして、日本植民地時代に建てられた同性愛の噂の絶えないある建物に目を止めた「あなた」は、遠く京都の稲荷神社から台湾に流浪してきた狐の神魂のおとぎ話を思い出している。これらの描写から、台北での街歩きを通して自分の記憶の中にある風景が既に消失してしまったことに気づく「あなた」が、昔の記憶のまま思い描くことしかできない A の存在や、急に自分の記憶や出自を証明するものに出会えなくなってしまった自分の状態を、本来の居場所を失い流浪する神魂に重ね合わせていることがうかがえる。つまり、自分自身を、記憶の中にさまよい生きるほかないある種の亡霊のような存在に感じているということだ。その亡霊のような存在は、小説の冒頭における「まさか、あなたの記憶が何の意味もないなんて……」という問いかけに加え、「『あなたの記憶』の蹉跌」（清水 2000：315）にまさしく表れている。同時に、清水の提示した、「〈記憶〉の崩壊・流失に直面してしまった〈あなた〉への問いかけ」（Ibid.）をした「わたし」とは誰かという問題について、先に明らかにしなければならないだろう。

清水によれば、『古都』「では〈記憶〉ばかりか、〈わたし/あなた〉の存在論的位相までもが揺さぶられ、漂流しはじめる」（Ibid.）。個人記憶を語る時には、自伝体が多く採用される。自伝的であるということは、ナルシストとして、特権的なソースとして個人的な経験に頼っており、制御できないものであるため他人には曲げられないようになっているということだ。しかしながら、ジャネット・ガン（Janet Gunn）が述べるように、自伝が「自分を書くという私的な行為」ではなく、「自分を読むという文化的な行為」だとすれば（Gunn 1982：8）、自伝体は、「わたし」の真正性ではなく、歴史や文化の中での自己の生活経験の解釈を通して、世界の中での「わたし」の位置を示すものである。『古都』に用いられた二人称はさらに、自らの記憶を見せる主体の居場所を探求し、その状態を示唆している。物語では「あなた」の記憶を大切にしており、記録した「わたし」は「あなた」とは異なる時空にいるかのように見える。『古都』では「あなた」は現時空において登場した人物のほぼ誰とも関わっておらず、誰にも知られていない。どのような形であったかは知らされないが、失われた記憶とその記憶を持つ「あなた」が記録されている。その記憶を記録した、「あなた」のことを知る唯一の人「わたし」は霊媒のような存在としてとらえられるのではないだろうか。

この点に関して王徳威は朱天心について、「都市の限られた空間の中で、彼女は割れ目の間に幽霊のように入り込み、亀裂や朽ち果てた壁を見ている。台北は日々変化していて、遺跡の痕跡があっても、もう戻れないほど廃墟化している」と述べている（王 2007：214）。だが、『古都』では作者は直接廃墟のような台北を体験しその体験を表現しているのではない。物語は現実と想像が混在しており、一種の記憶の媒体であるため、「あなた」が記憶の中の A を示すように、「あなた」の空間の上で、もう一人の「わたし」が自分から疎外された過去の「あなた」を語っている。すなわち、作者は亡霊化した「あなた」と霊媒化した「わたし」という二つの化身を通じて、亡霊のような「あなた」と「あなた」の記憶の中の台北に相對する廃墟のような台北を表している。その上で、その失われてしまった人やものを書くことには、「惜しむ」、「弔う」というような意義が存在するのである。

だとすれば、物語中の記述から、清水の述べた「〈わたし/あなた〉の存在論的位相までもが揺さぶられ、漂流しはじめる」（清水 2000：315）理由も明らかになってくる。物語の末尾において、「ここはどこ？……あなたは声をあげて泣いた。/……/煌めく海よ、美しいの島よ。

そはわが祖先聖王の運命のかかりしところなり⁽⁴⁾」という記述がある（筆者注：/は改行を示す）。現時点の台湾において記憶の中の建物といったものが消失しており、そこが見知らぬ土地のようになってしまったため、「あなた」は迷子のようになり混乱状態に陥る。その直後、六点リーダー（……）を用いて、ある種の空白を示してから、物語は「台湾通史序」における台湾＝美しい島と台湾人の祖先＝明朝の王と民についての記載で終わる。「台湾通史序」の記載が「あなた」と「わたし」のどちらの思念に属するものかは、判断しかねる。にもかかわらず、このくだりは、「あなた」が迷子のようになり混乱状態に陥った後に喚起されたものとして、「わたし」によって語られる。こうした記述の存在状態は、「わたし」と「あなた」の位相が揺さぶられていることを表している。「わたし」は、記憶の中の「あなた」の記憶を語る。そのため、「わたし」の記憶が「あなた」の記憶の影響を受け、干渉されているのである。このように記憶というものは、あまりに脆弱であり、外からの影響を受けて変質しやすい。そうした記憶は、物語においていかなる機能を持っているのだろうか。

2. 記憶の脆弱性

物語での個人の記憶に関わる記述を読んでいくと、ある種の悲観的な状況が看取できる。物語の中では、「記憶」に関する記述はすべて特定の場所や建造物などのものに関連しており、そうした記憶はものが消えていくにつれて忘れ去られていくのである。例として次のような記述がある。

たぶんこういうことだろう。死の間際、もしもあと少しだけ時間があり、記憶も微かに残っていて、まだどこか行きたい場所を選べるとしたら、多くの人が何はともあれ急いで病院を抜け出し自分のよく知っている場所、たいていはいわゆる家に帰りたいと願うように、あなたは、きっとここを選ぶだろう。なぜって、たとえ微かにせよ人生の痕跡を留めてきたような場所が存在し、あなたに関係するあらゆるものがまだそこに存在しているのであれば、恐らくそれらはこの先もずっと存在し続けていくかもしれず、そうであれば、やがてあなたがこの世界から消えていくにしても、その意味は薄められるに違いないのだ。/〔中略〕/恐らく、あの都市の、あなたがかつて熟知し記憶していたものは、何から何まであなたより先に死んでしまっているに違いない⁽⁵⁾（筆者注：/は改行を示す）。

「あなた」のものでしかなかった「あなた」の記憶は、元来、「あなた」が生活していた場所に関連するものによって喚起されることが可能であった。だが、記憶と密接な関係にあるものがある程度抹消されているため、「あなた」の死によって彼女の記憶が消えてしまうことは避けられないのである。ゆえに「あなた」の記憶を書くことは、その記憶に対して積極的意義をもたらすことができない。なぜなら物語では「まさか、あなたの記憶が何の意味もないなんて……」という問いかけがなされてはいるが、いかに記憶の意義を取り戻すのか、それは途方に暮れたように表現されている。読者であれ、「あなた」の記憶を書く「わたし」であれ、誰もが記憶の薄れていくさまを黙って見ていることしかできないのである。

加えて、個人記憶は特定の場所や建物と密接な関係を持っているがゆえに、それがその場所や建物の変化や崩壊により干渉を受ける可能性がある。例えば、「二・二八記念碑の区画はあなたの記憶のなかの新公園をメチャクチャにしまった。まさかあの何株もあったオリーブの木まで誰かのお怒りに触れたというの！」という記述がある⁽⁶⁾。二・二八記念碑が建造されたため、「あなた」が昔訪ねた新公園の風景は変化している。そうすると、「あなた」の新公園

とそれに関わる生活経験に対する記憶と目の前の現実が異なっているため、その記憶も疑われ、「あなた」にとって意味をなさなくなっていく可能性さえある。その上で、仮に、アイデンティティと個人記憶に密接な関係があるとすれば、関連する個人記憶の持つ本来の意味がなくなっていく過程にしたがって、アイデンティティも変質し疑われていくということが起こりうる。このことについて、次の部分では、物語における個人記憶の変質の過程とその影響について考えてみよう。

3. パリンプセスト

朱天心は、『古都』日本語版のまえがきで、先に引いた部分に続けて、次のように《古都》での多層的な描写について述べている（朱 2000：3）。

わたしは小説「古都」のなかで、敢えて読者を混乱させるべく、新旧様々な時代の街路名や地名を混在させるような書き方をしました。あたかも、あたかも十五年前のある秋の日、古代ギリシアのトロイの廃墟を覗き込み、前後七回にわたって地震や火災による絶滅／再生を繰り返した化石断層のような城跡を、一層また一層と見分けようとしたときのように。

《古都》のような多層的な描き方はパリンプセストという書物の概念に合致すると思われる。パリンプセストとは、羊皮紙などに書かれたテキストが、すべて、または部分的に消された後、別のテキストで上書きされたものをいう。つまり、後のテキストが元のテキストの上に重なっている状態のことを指している。言い換えれば、パリンプセストとは〈多層の記録〉である。もともと文学の概念であり、最近では、この言葉は、物理的な都市の形態だけでなく、日常的な都市生活の記憶や経験も含めて、都市を説明するためのメタファーとなっている

（Huyssen 2003）。パリンプセストは、新しい構造物や再利用された構造物が古いものと並んで存在するという都市の変容だけでなく、都市がどのように経験されてきたか、あるいは人生の物語がどのように既存の空間の上に書き込まれ、書き換えられるかという変化についても考える方法を提供している。例えば、この物語の中にコラージュされた数多くの虚構的な話や歴史資料といったテキスト及びテキストにおいて記されたものの中で、何が破壊されたり消されたりしているのかを見ることによって、それを通じてさまざまな破壊による都市での居住者の経験の変化を見出すことができる。《古都》のヒロインは台北の居住者であるため、パリンプセストの視点から見ると、彼女の記憶の中の台北を、実際の台北と見分け、その違いによる空間的变化を見出すことができる。

また、物語の随所に挟まれる複数の異なる歴史的文脈を持つ記述が示すように、台北は少なくとも清朝、日本統治時代、外省人統治時代、本省人統治時代とそれらの時代による空間的变化を経ている。物語でその4つの時代の空間的变化を示すのはまさしく「一層また一層と見分けようとした」という作者の意図であるように思われる。さらに、その多層にわたる空間的变化による記憶への干渉と損害は、居住地での身分、つまりアイデンティティにも脅威をもたらす。また、《古都》における記憶と忘却が表すアイデンティティの存在様式を明らかにするために、その記憶と忘却の時系列的な変化を考察する必要がある。次の章では、時代による空間的变化及び記憶への干渉とアイデンティティについて分析してみよう。

IV 空間的变化と記憶

1. 人工的介入

朱天心は回想録『三十三年夢』において、『古都』のインスピレーションの源の一部として京都の清涼寺について言及している。

住宅街の真ん中にありながら建物の本当に大きなその清涼寺に一目惚れした。見た目通り建物内はとても広く、脇門や本門が長時間開け放たれており、人々は近道するためだけに境内を横切ったり、本堂を一目も見ないのはもちろんのこと、礼儀正しい者でも一瞬だけ手を合わせに行くのみといったほどである。長年にわたり、私はある種の複雑な気分とともに清涼寺を楽しんできた。お寺は簡潔な造りで大きく、山門にしても、本堂にしても、老朽化した鐘楼にしても、そのシンプルさは、私の宗教への期待と想像にぴったりである。また、時計台を囲む小さな梅林は、自然に介入しコントロールしすぎる日本庭園とは異なり、野草が生い茂っている。いわゆる庭園の美学について、私はほとんどの人が持っているような東洋／調和、西洋／対立というような見方を持っていない。特に、野生の花と植えられた花が共生して育つイギリス式が好きで、たとえ苔地であっても一本一本の苔が人の許可を得て生育しなければならないような日本式や、あるいは、いかにも人工的に作られたような幾何学的な形をしているイタリア・フランス式の庭よりも好きであるが、それとははっきりと意識的に人の手が入った歩道や庭を除けば、それ以外の植物に対する姿勢は野性的で寛容的であるように思える。/私はその名の通り、清涼寺の境内の荒野の様子が好きで、その思いを小説《古都》の中にも密かに吹き込んでいる⁽⁷⁾（筆者注：/は改行を示す）。

作者は清涼寺のような自然に生長した野生の植物と植えられた植物が形成した共生状態に憧れを示している。また、「東洋／調和、西洋／対立というような見方」への拒絶から作家が個別文化に対するステレオタイプといったものに反対していることがわかる。作者は清涼寺が敷地内の洗練されていない風景を許容する、という包容力を好んでいる。これが取材されて《古都》の物語の内容の一部となったのち、それに関連する内容が重要な隠喩的機能を持っていることがわかる。本稿の冒頭で述べた小説のまえがきにおいて作者は「政治の強い介入によって、一つの都市どころか一つの時代までもが記憶喪失に陥る」ことに対する批判を記している。そうすると、物語におけるあらゆるものとそれらが形成した風景には政治性が与えられているといえる。すなわち、この物語において記憶を喚起するものとそれに関わる風景の喪失は主として自然な時代発展のためではなく政治の介入に関連しているため、風景の喪失によって脆弱な個人記憶とその記憶の持ち主が消え去ることを弔うと同時に、物語は実際には風景への政治的介入を行なったステークホルダー、つまり権力を握る人々を批判している。しかしながら、前述したように、物語では清政府、日本植民地政府、外省人政府、本省人政府という、四つの政権保持者が描かれているので、物語における具体的な批判及びその中身を明らかにするためには、それぞれの政府の政治的介入について、個別に分析しなければならないだろう。

2. 日本植民地政府による介入

物語では、連横（1878-1936）が執筆した『台湾通史』を通じて清朝における台湾の様子が述べられている。『台湾通史』の著者について、連横は祖先が客家人であり、康熙年間中国大陸から台湾に移住した。彼は清朝の台湾で生まれ育ち、日本植民統治が開始されたことに刺激を受け、1908年から1918年の10年間をかけて台湾本省人による初めての通史『台湾通史』を執筆した。《古都》における『台湾通史』の記述が示す台湾と日本植民地時代の台湾を比較

することで、当時の台湾における都市風景への政治的介入の痕跡をたどることができる。

物語の随所にはさまれる『台湾通史』の記載によると、清代に大陸から台湾にやってきた人々は当時の台湾を未開で環境の劣悪な土地として描写するとともに、「煌めく海」「美しい島」として、大陸からやってきた人々の手が入る前の様子を含めたかつての台湾の様子を記していることがわかる。また、物語ではヒロイン「あなた」が郷土文化についての発表を準備する娘を手伝う際、北勢湖を思い出し清朝末年の昔話を連想している。

北勢湖は清朝末年に台北の城郭が建てられたときの建材と深い関わりがあった。一説によれば、石材は大直や北勢湖の山から切り出した岩塊が使われ、レンガや瓦は北勢湖と枋寮庄の窯のもの、石灰は大稲埕や河溝頭の石灰窯から用立てられたという。しかし別の説では、石材は唹哩岸の安山岩、レンガは廈門から調達されたもので、粘土は台南にある赤嵌楼やその他の古城と同じく紅毛土、つまり蒸したもち米に黒砂糖と石灰を混ぜたものが使われたともいわれる。/それから十年後、城郭は日本人によって破壊された。/夢の世界のような北勢湖、もはや二度と訪れることのなかった北勢湖。/日本人は、清朝の人間が「廷議によりその地を墟てようと決議した」のと同様で、「一億元台湾売却論」を主張したりした。かれらは北勢湖で苦労して焼かれたレンガや瓦を取り壊し、三線道路を開き、この南の島ではどこでも見かけるカタンと南国ムードを代表するビンロウの樹を、百五十株（愛国西路に）と百株（信義路に）植えたのだ。/半世紀後、カタンは成長して緑の城壁となった。そこはあなたたちの女子高と隣の男子校とがいつも和平交渉を行う国境線で、あなたとAはよくそこで彼らと待ち合わせしたものだった⁽⁸⁾（筆者注：/は改行を示す）。

北勢湖の山から切り出した岩塊で造られた台北の城郭が、清朝末年の台湾人の住む街の風景を形成した。だが、台北の城郭は日本植民地政府によって破壊され、城郭があった場所にはカタンとビンロウの樹が植えられた。それに加え、日本植民地時代に植えられたカタンが形成した風景は、「あなた」とAの高校時代の記憶とも結びついている。その風景の前身はもともと清朝の建物によって形成されたものであったが、清朝の建物が日本植民地時代の「樹」に取って代わられたため、今の様子となった。その場所の風景が「あなた」とAの個人記憶に結びついているということは、清朝末期における同じ場所の風景が当時の台湾人の個人記憶にも結びついているということを彷彿とさせる。したがって、清朝時代の風景が日本政府によって抹消されたことで、その風景に結びついている清朝の台湾人の個人記憶の意義も失われてしまったものと考えられる。

日本植民地政府の開発によって排除された、と述べられている清朝時代の建物には、台北の城郭だけではなく太古巢というところがある。太古巢は日本が橋を建設する際に取り壊された清朝時代の療養院である。北勢湖、太古巢といった記述は、日本政府の政治的介入によって清朝当時の風景や建物が排除された事実を示している。一方で、日本統治に切り替わった後に記された書物である『台湾通史』は、失われゆくかつての時代を記録したものとして意義を持っているといえる。日清戦争で台湾を獲得した日本が台湾における清朝時代の事物を排除した後、台湾における清朝遺民は『台湾通史』の記録を通して自らの個人記憶を保存した。つまり、彼ら清朝遺民の個人記憶は日本統治によって完全に失われた訳ではなく、書籍を通じて歴史記憶という形で後世に伝えられたため、それを読むことを通じて当時の記憶を喚起することが可能である。清朝の台湾人の記憶が保存されているのであれば、なぜ物語において「あなた」は記憶の実存に対してそこまで悲観的な態度を持つのか、それはまだ明らかになっていない

い。物語において外省人、本省人統治の時代における政治的介入とそれに対する記憶の保存方式はいったいどのように変化したのだろうか。

3. 外省人政府による介入

外省人政府による台北都市空間に対する政治的介入というと、それが日本植民地時代の建物に関係するものであると推測できる。したがって、それに対する個人記憶の存亡も日本に関わったものとなっている。それに関して、物語では「あなた」の台北の円山に対する記憶についての話が見られる。

もちろん、あなたが劍潭について知っていたことは、これとはまったく違っていった。五歳のころ、おめかしして両親に手を引かれ、動物園のこども遊園地に初めて連れていってもらったときのこと、バスから降りると、あなたはもう他の場所など眼に入らなかった。目の前の広々した広場はカーニバルの賑わいに溢れていたから。その雰囲気を楽しむことと言ったら、三十年後にあなたが娘を連れて遊びに行ったディズニーランドの、あの手この手の凝った演出にも勝るものだった。空いっぱい色とりどりの気球やシャボン玉、音楽が広がり、さまざまな食べ物の屋台からはおいしそうな匂いと呼び売りの声が流れてくる。大きな看板が何枚か立っていて、円山のとっぺんをすっぽり覆い隠していた。確かずいぶん素朴な看板で、デザインとかロゴとかそんなご立派なものではなく、単に大きな字がいくつか書かれているだけだった。広告を出していたのは大同電気扇風機とか白花サラダ油とか達新印のレインコートといった、当時まだ数少なかった民族資本のメーカーか、さもないと政府のあれこれのスローガンの類だったと思う。キップ売り場みたいな小さな小屋は壁一面に玩具がぶら下がっていたが、これがまた今思えばひどく安っぽくて冴えない玩具ばかりで、当時両親がなかなか買ってくれなかったのも無理はなかった。/それから二、三年後、山のうえにあった日本時代の神社の跡はきれいに片づけられ、中国の宮殿風ホテルが建ち、もっぱら国賓の接待に使われた。そのため山麓にあった違法建築のバラック長屋は跡形もなく取り壊された。まるでサーカスの一座が楽日の夜のうちに、よその土地に引っ越して消えてしまったみたいに⁽⁹⁾ (筆者注: /は改行を示す)。

「あなた」は幼い頃両親に連れられ円山の遊園地を訪れた記憶があり、日本時代の神社の跡地に外省人政府によって国賓接待に使うホテルが建てられたことが記されている。大陸からの外来政権である国民党は二・二八事件以降台湾における日本植民地時代の文化や建造物を排除し、台湾には日本時代の記憶を喚起する建造物や街並みは少なくなっている。しかし、日本植民地時代の街並みの中で生活した記憶を持つ人々は、京都をはじめ日本という場所において自分の生活記憶を喚起させる建造物や風景を見出すことができるという可能性、つまり、日本植民地時代の台湾と現在の日本に共通する風景が、物語の随所に示されている。次にその一部を引用する。

台湾神社は、もしも戦争末期に日本軍飛行機の墜落事故による火災で焼けてしまわなかったなら、あなたがよく参拝に出かける八坂神社と同じような感じだっただろう。乃木希典総督の時代、帝国議会の建議を受けて台湾神社を台湾統治の中心地台北に建立することが決定された。当初は台南や基隆も候補地に上がったのだが、最終的にここに決まった理由は、もしも台北の旧城を御所に見立てたなら、基隆河はすなわち鴨川に、劍潭山は東山となって、台

北盆地全体の地理的な位置関係が、ちょうど京都を髣髴とさせると考えられたためといわれる⁽¹⁰⁾。

これに加えて、物語において引用される川端康成の『古都』は、過去の記憶を探そうとする時、京都が良い結果をもたらすところだということを示している。日本植民地時代が終わり、台湾における日本時代を表す事物が抹消された後、当時を過ごした人々には、日本という場所を訪れることで、自らの記憶を再発見できるのだ。物語において作者の描く京都が果たしている役割がここにあるといえる。

外省人統治時代に日本の事物の排除が行われた後、続く時代である本省人統治時代、省籍矛盾の背景のもと、「あなた」は外省人第二世代としての記憶への政治的介入を受けた直接の関係者として、最も深刻な問題に直面するようになったことが推測される。個人記憶が消滅していく脅威に対して、清朝及び日本植民地時代の記憶のような、歴史書または国外における空間を通じた個人記憶の保存は、「あなた」の記憶にも見られるだろうか。

4. 本省人政府による介入

外省人政府が本省人政府に取って代わられた後、新政府による前政府時代の遺物の排除により、外省人統治時代を過ごした記憶を持つ人々にとって再び自らの記憶を呼び起こすことは困難なものとなった。日本統治終了直後の国民党時代の台湾を生きた語り手にとって、当時の記憶を「モノ」によって見いだすすべはなくなる。風景や建造物など有形物によって記憶を喚起することを重視する語り手が、人々の記憶に政治的介入を加えた新政府を批判していることが見てとれる箇所を次に引用してみよう。

あなたはあの専制政治に反対して海外に亡命し、三十年ものあいだ帰国の許されなかった反体制運動家のことを思い出した。時代も移り変わり、彼もみごと県長に当選したのだが、そのとたん、ご多分に漏れず、この南の島に最後に残された湿地帯を高汚染高エネルギー消費の重工業地帯に変えてしまったのだった。/彼はかつて自分が批判対象とし、転覆したいとさえ考えてきた外来政権とまるきり同じことをやったのだ。でなければどうしてあんなことを平気でしでかせるだろうか？ いつかある日、あの緑の城壁のそばを通りかかったあなたは、ふと気づくと信じがたいことに、あなたたちのあの樹齢百年のカタンたちまでもが道路建設の大義名分のもと、一夕のうちに姿を消してしまっているのを発見するかもしれない。そして突然親友を失ったみたいに、打ちひしがれてガックリ落ち込むのだ。/あなたは娘に、自分たちがかつてこの城市で暮らしていたその生活の痕跡を伝えようとして、はたと困ってしまった。昔住んでいた村、犬を埋めた場所、ダンスのレッスンをした教室、無限の記憶に満ちたあの郊外の二本立て映画館たち、娘の父親と初めてデートをした場所、あなたと親友がいちばん好きだった喫茶店、学生時代よく出入りした書店、結婚したばかりの頃借りていた新しい家……、それどころか、ついこのあいだ娘が相前後して通った二つの幼稚園さえ（その跡地は主人がころころ替わり、目下のところは小皿料理の「鶯之郷」だ）、すべて消え失せてしまっているのだ……⁽¹¹⁾（筆者注：/は改行を示す）。

本省人新政府による外省人政府時代の記憶への政治的介入は、新政府自らが批判してきた外省人政府のやり方と全く同じものであり、人々の記憶への政治的介入は、「あなた」にとって最も好ましくない方法で繰り返されているということが述べられている。また、本省人政府に

よる政治的介入は、日本統治時代や外省人統治時代における政治的介入のように開発または脱植民地化の名目で行われるだけでなく、本土化、つまり台湾人＝本省人のためだけの台湾をつくるという政治的な目的のもとで行われる排除であることも、物語では示される。そのような政治的目的のために古い時代の事物が抹消され破壊される台湾では、「あなた」が仮に台湾人として歴史書を記録し記憶を保存しようとしたとしても、そこには、外省人の居場所は既に存在しない。「あなた」が最も重要視する個人的な生活記憶に結びつく風景や建造物も既になく、「あなた」は自分の生活経験や愛惜すべき個人記憶をどこにも見出すことができないのだ。

それと同時に、物語には幾度も『桃花源記』の記述が引用されている。それらの記述は実際には完全な引用とはいえず、細部に改変が加えられた記述となっている。例えば、次のような記述がある。

漁師は甚だ不思議に思い、さらにさかのぼって、その林の奥まで見届けようとした。林は水源のところで尽きて、そこに一つの山があった。見ると山には小さな口があり、何かしら光線が射しているようだ……。〔中略〕阡陌（縦横の道）交わり通じ、その中を往来し種作（畑仕事）する男女の衣著（服装）は悉く日本人の如し。黄髪・垂髫（老人から子供まで）、怡然として自ら楽しみり⁽¹²⁾。

芳賀徹は桃花源とは「けっして、夢うつつのうちに垣間見られた風景といったものではない。〔中略〕人間が人為を持って構築し経営している生活共同体であるらしい」と指摘している（芳賀 2019：33）。そうすると、物語における桃花源についての記述はかつて存在した「あなた」の心の中での理想的な台北を示唆していることがわかる。それはつまり、日本統治期終了直後、外省人が国民党を伴い着陸したところの台北である。しかしながら、唐小兵は『桃花源記』の引用が、物語の終わりに近づくにつれて「主題音楽のように進行中に強くなる」と指摘している（唐 2002：253）。この主題音楽はエレジーであり、音楽が強ければ強いほど、「あなた」は絶望的な現実の事実に近いしていく。すなわち、「あなた」の理想的な台湾はもはや永遠に実現されることのないユートピアのような存在であり、それに相対する現実の政府が支配している台北を、「あなた」の個人記憶が失われたディストピアとして描いていることがわかる。つまり、作者は物語を通して、ある時代を生きた人々の記憶が政治的介入によって抹消される過程を描く一方、そのような記憶を許さないところ、及びその政府つまり現在の台湾政府を、記憶に関わる建造物や事物を排除し抹消するディストピアとして描き痛烈に批判していることが読み取れるのである。

V 文化的アイデンティティと政治的アイデンティティ

ユートピア的ディスクール政治的機能について、フレドリック・ジェイムソン（Fredric Jameson）は「ユートピアのジャンルの最も深遠な使命とは、私たちが〈ユートピア〉そのものの想像を構造的にできなくなっていることを、局所的かつ明確に、豊富な具体的な詳細とともに理解させることである。しかもそれは、なんらかの個人の想像の失敗のせいではなく、私たちが多かれ少なかれとらわれている制度的・文化的・イデオロギー的な閉止=完結性（クロージャー）の結果なのである」と論じている（ジェイムソン 2012：95）。そうすると、『古都』における「あなた」の個人記憶の中のユートピアを想像できることを導いた、ジェイムソ

ンの述べた「制度的・文化的・イデオロギー的な閉止=完結性（クロージャー）」は外省人政府の政治操作を指している。この点に関しては、作者の回想録で明らかにされている。

三月の総統直接選挙（一人一票投じられるということ、これを人々が国家の主になったといわずして何をそういえるのか？）のためにネーション意識の論争が止むことはなく、四六時中愛していると言わせようとしてくるストーカー的恋人を思わせるような、声高に唱えられる「愛台灣（台湾を愛する）」は過去の事物に対しても言及、批判がなされる。/建国神話に合わない記憶や雑音は全て無視され黙殺される、このような事態は台北で早い時期から既に始まっており、市民の記憶を尊重せず公共の場所の名称を変更するといった（私は他の多くのの人々と同様、かつての統治者を記念する介壽路も無味乾燥な新しい公園の名前も好きな訳ではないが）、歴史の選択的な記念或いは黙殺に対し、一体我々はこれ以上何を残すというのだろうか？「日本統治による清の排除、国民党統治による日本の排除」という同じ轍を再び踏んでしまうことになるのではないか？これは人々が国家の主となった一つの時代の一つの国の人々の歴史に対する姿勢として健全なものではないのではないか？/私は、いわゆる認められていない自由について取り上げたい。この場所を愛してはいないが様々な事情を持つ人々（秦（筆者注：中国大陸を示す）から逃れた外省人、大陸籍配偶者、出稼ぎ、貧困や地位の低さによる移民不能……）はここにとどまっていけないのか。義務を果たしているにも関わらず、単一の語彙や方法でその土地に暮らす感情を表現する（または表現しない）ことを望まないもしくはできないという理由だけで何度も忠誠心を問われるのだ。これは、私の認識している「民主国家」の定義とは遠くかけ離れたものである⁽¹³⁾（筆者注：/は改行を示す）。

朱天心によれば、本省人政府はネーション意識のイデオロギーを操作するために、民主制度を提唱しつつ、外省人を含む台湾以外の地域とより関係が密接な人々を排除している。その排除手段は本省人と異なる市民の記憶を抹消することである。結果として、本省人政府は「日本統治による清の排除、国民党統治による日本の排除という同じ轍を再び踏んでしまう」のである（朱 2015：227）。作者は本省人政府が「民主国家」を求める一方で反体制的な声や記憶を黙殺しているという矛盾した状態を批判している。この視点から見ると、小説《古都》は政治性を持って描き出されたある種の反政府記述としてとらえることができる。作中の「あなた」は生活経験を重要視した語り手の文化的アイデンティティの側面を代表し、「あなた」を書く「わたし」は語り手の政治的アイデンティティの側面を代表して、政治権利を重要視している。ここで着目すべき点として、「あなた」は個人記憶を語っているため、想像的な要素が強く、語り口は客観的ではないように思われる。そのため、「あなた」を疎外して「あなた」の話を代弁する、より「客観的」な「わたし」が存在する必要がある、「わたし」の持っている意義はここにあると考えられる。つまり、この語りの形式には、「あなた」の権利を守るため「わたし」は訴える必要がある、という意志が込められているといえるだろう。

朱天心は、《古都》以外の場所でも、政治的アイデンティティについて語っている。黄錦樹は、朱天心の回想録が彼女の作品の政治性を示していると指摘している。黄によれば、政治的関与の側面から見ると、朱天心は胡蘭成の忠実な弟子である⁽¹⁴⁾。その政治的関与について、「キーワードは『革命』、土、『目的なき野望』、新語は『インテリ』」（黄 2016：451）である。その上で、黄は《古都》を含む小説の中で、「『方法として覚えている（我記得作為方法）』というのが、かつては力強く示されていた。それは確かに介入の文学であったが、少な

からず犠牲を払い、無数の敵と偏見を抱えていた」(Ibid.: 458)と論じている。作品自体では想像(記憶)と現実の両方の要素を示し、それが作品に対する解釈の可能性を狭めているのだ。特に《古都》では「あなた」の記憶を語る二人称を通じて読者の存在さえをも物語に含めるという手法が用いられているため、物語の批判対象が鮮明になりすぎる。そうだとすると、朱天心の作品における(文化的)個人記憶は、もはや単に私的なものではなく、特定の対象を批判する(政治的)機能という、公共性を持つものとして浮上してくる。それは朱天心が持つ知識人の社会集団への関心に関わっているものと思われる。

VI むすび

《古都》において「あなた」は外省人第二世代であり、台湾で生まれ育った人である。外祖父と母が本省人であり、父は中国大陆を離れ台湾に定住しそこに根を落ろした。だが、父の故郷のため「あなた」は「台湾人」ではないような扱いをされ、居住地における文化資源を共有する権利を奪われ、縁もゆかりもない土地、つまり中国大陆へ退去しろといった言葉をかけられる。物語における最も大きな問題は、抹消の歴史に対する忘却であり、台北は抹消と忘却により遺された残骸が形成した古都のように描かれている。「あなた」は台湾において、個人記憶を保存する可能性を持つ事物が抹消と忘却によって残骸のようになってしまい、自らの記憶の消失の脅威に晒され、そこに存在している感覚の薄れた亡霊のような状態になったのだ。

朱天心の作品について、王徳威は「朱天心の問題は、歴史の軌道の外に放り出されたり、自発的に追放されたりする、ということである。彼女は自らが宇宙の洪水の過客、時の鴻濛における遺民になってしまうことを警戒している(または憧れている!)」と指摘している(王 2007: 53)。しかしながら、《古都》が示したのは「あなた」が「歴史の軌道の外に放り出された」状態だけではない。物語で「あなた」の存在状態のなりゆきを目撃し、弔う「わたし」は「あなた」の個人記憶の意義を失わせた今日の台湾の本省人政府に対し、その責任を問い質すような役割を担っている。史書美が提唱したサイノフォン研究は次のように、「ディアスポラには終了日がある」ということを強調している。

人種差別やその他の敵対的な状況は、移民に過去への逃避と慰めを求めさせ、文化やその他の優越感のコンプレックスは、移民を地元の人々から疎遠にさせる。ディアスポラには終わりがあつたことを強調することは、それゆえ、文化的・政治的実践は常に場所に基づいたものであると主張することである。誰もが地元の人になる機会を与えられるべきである(Shih 2010: 45)。

そうだとすると朱天心の《古都》は、サイノフォン研究の実例としての重要性を持っている。物語は移民第二世代である「あなた」の惨状を暴露することを通じて、移民が地元の人になる難しさを示すと同時に、移民といった弱者を代表して声をあげることを通じて、彼らの居住地における政治参与への可能性を示している。台湾は民主社会であり、自らの記憶が一定の程度抹消された外省人は、政権交代を通じて再び権力を握る可能性を持っている。その時、外省人政府が《古都》において描かれたような絶望の異境にもみえる台北ないし全台湾に、繰り返される抹消からの脱却という希望、または抹消の歴史を再び繰り返すという絶望のどちらをもたらずのかは注視される場所である。

最後に、サイノフォンについての史書美の次のような説明によって、本稿を締めくくります。

い。

チャイニーズ・ディアスポラという概念は〔中略〕中国を端緒として中心に据え、中国の世界的な影響力を暗黙のうちに示していた。サイノフォンとは多くを指す言葉であり、生きた文化や言語として、一律の定義では収まりきらない。しかし、サイノフォンは中国の外に定住していることを主張し、中国の中ではマイナーな地位を占めている (Shih 2007: 34-35)。

「あなた」と朱天心のような、ナショナリズムないし歴史記憶を用いて自分の存在、つまりアイデンティティを定義することができない「中国」の周縁にいる人々は、個人記憶の抹消が進むにつれその存在の証がこれからも徐々に消失してゆくかもしれない。彼らに関する歴史叙述が今日いかなる方法でなされていくのか、それは今後も考察に値する課題であろう。

付記 本稿を執筆するにあたり、大阪大学深尾葉子教授、宮原暁教授にはご指導とご助言を頂いた。並びに査読者の方々に細部にわたって貴重な教示を頂いた。ここに記して深謝の意を表する。原稿を校正して下さった西谷有理沙さんにも感謝申し上げる。

注

- (1) 朱天心『古都』の日本語訳2頁。本稿での原著からの引用は、『古都』2002年版に基づく。日本語訳は、朱天心2000「古都」『古都』（清水賢一郎訳）国書刊行会、9-146頁に基づく。以下、同書の参照箇所は、「原文「参照テキスト」(XX)」というようにページ数を()内に明記する。また日本語訳は、朱天心2000「古都」『古都』（清水賢一郎訳）国書刊行会、9-146頁に基づき、「日本語訳【XX】」というように引用箇所のページ数を【 】内に明記することとする。
- (2) 原文は、「這是哪裡？……，你放聲大哭。」(246) 日本語訳【145】
- (3) 原文「難道你的記憶都不算數……」(160) 日本語訳【9】
- (4) 原文「這是哪裡？……，你放聲大哭。/……/婆婆之洋，美麗之島，我先王先民之景命，實式憑之。」(246) 日本語訳【145】
- (5) 原文「是這樣吧，在死之前，若還有一點點時間，還有一點點記憶，你還可以選擇去哪裡，就像很多人急著無論如何要離開醫院而回到他熟悉之地通常是所謂的家，你，會選擇這裡吧，因為，因為唯有在你曾經留下點點滴滴生活痕跡的地方，所有與你有關的都在著，那不定它們就會一直一直那樣在下去，那麼你的即將不在的意義，不就被稀釋掉了嗎？/〔中略〕/大概，那個城市所有你會熟悉、有記憶的東西都已先你而死了。」(206) 日本語訳【80-81】
- (6) 原文「二二八紀念碑區弄亂了你記憶中的新公園，天啊難道那幾株橄欖又礙誰惹誰了！」(225) 日本語訳【109】
- (7) 原文「我第一眼就愛上那廁身在民居中、但屋宇真是大器的清涼寺。清涼寺確如其貌的大器，長時間開放側門與大門，不介意居民們只為了抄捷徑匆匆穿過它境內甚至一眼也不看本堂遑論禮貌的前往合掌參拜片刻。/多年來，我始終帶著一種複雜的心情喜歡著清涼寺，它簡約大器，無論是山門或本堂或破舊的鐘樓，很符合我對宗教的期待與想像，此外圍繞著鐘樓的一小片梅林，其下竟野草叢生，全不同於日本庭園的過於介入控制自然，對於所謂庭園美學，我始終不以大多數人認為的東方/和諧、西方/對抗的看法，我尤喜歡英式的野花家花共生怒長，勝於日式的哪怕是苔地也近乎每一絲苔蘚都須得人允許才得存在生長，或有日義式法式庭園的喜以明

顯人工才做得到的幾何圖形的園圃，但我倒以為除了人行路徑和園圃是清楚自覺的人工介入，其餘對植物的態度是野放的、包容的。/我喜歡清涼寺境內的野地狀態如其寺名，我在小說《古都》中偷渡過這感情」（朱 2015：122）。

- (8) 原文「北勢湖事關清末台北建城的材料，有說石材部分採掘大直北勢湖山的岩塊，磚瓦係北勢湖和枋寮庄的磚窯，石灰來自大稻埕河溝頭的石灰窯；但另一說是石材來自唭哩岸的安山岩，磚向廈門採購，黏土用紅毛土，就是精米蒸混紅糖石灰，如同赤炭和其他古城的構成。/其後十年，日人拆城。/夢境一樣的北勢湖，再也沒去過的北勢湖。/日人跟清人一樣，不是「廷議欲墟其地」就是「一億元台灣賣卻論」。他們拆了北勢湖辛苦燒成的磚瓦，闢成三線道路，植上一五〇株（愛國西路）一〇〇株（信義路）南島遍見的茄冬和代表南國風情的檳榔椰子樹。/茄冬半世紀後長成綠色城牆，是你們女校與男校最常議和的楚河漢界，你和 A 就常跟他們約在那裡見」（190）日本語訳【56】
- (9) 原文「當然你對劍潭所知全非如此，你五歲時，穿戴整齊的由父母第一次帶你去動物園兒童樂園，下了公共汽車，你哪兒都不想去，眼前現成一個又大又繁華的嘉年華廣場，其歡樂氣氛勝過三十年後你帶女兒去過的迪斯耐樂園所全力營造的，只覺滿天都是五彩氣球和吹泡泡和音樂，各式各樣小吃攤的香味和叫賣，幾個大看板遮住了整個圓山山頭，看板想來挺素樸，沒什麼圖案只有大字幾枚，做廣告的是當時僅有的幾家民族工業如大向電扇或白花油或達新牌雨衣或政府的一些砥礪口號之類，幾個票亭似的小屋掛滿了現在想來廉價難看的玩具，難怪當時父母不願意買給你。/其後兩三年，山上清除神社遺跡，建起中國宮殿飯店，專門用來接待國賓，山下的違建因此被清除一空」（173-174）日本語訳【30-31】
- (10) 原文「台灣神社，若非毀於戰爭末期日軍飛行機墜落所引發的大火，應該等同於你常參拜的八阪神社吧。乃木總督時代，帝國議會接受建議把神社設於台灣的統治中心台北，前此台南、基隆都曾經是考慮地點，最終決定的原因固定，若把台北古城當作皇居御所，那基隆河便是鴨川，劍潭山是東山，整個台北盆地在地理位置上便與京都相髣髴了。」（236）日本語訳【126-127】
- (11) 原文「乾乾抹淨，你想起那個因反抗集權政府去國海外三十年不能回來的異議人士，時移勢易，他一旦當上縣長以後，照樣把南島最後一塊濕地挪做高污染高耗能源的重工業用地。/他跟他以往批判甚而欲推翻的外來政權做的一模一樣。不然何以他們敢如此做呢，當有一日你路過你們的綠色城牆，發現天啊那些百年茄冬又因為理直氣壯的開路理由一夕不見，你忽然大慟沮喪如同失了好友。/你簡直無法告訴女兒你們曾經在這城市生活過的痕跡，你住過的村子、你的埋狗之地、你練舞的舞蹈社、充滿了無限記憶的那些二票兩片的郊區電影院們、你和她爸爸第一次約會的地方、你和好友最喜歡去的咖啡館、你學生時常出沒的書店、你們剛結婚時租賃的新家……，甚至才不久前，女兒先後唸過的兩家幼稚園（園址易主頻頻，目前是「鵝之鄉小吃店」），都不存在了……」（191-192）日本語訳【58】
- (12) 原文「漁人甚異之，復前行，欲窮其林，林盡水源，便得一山，山有小口，髣髴若有光……，有一刻恍惚，你不知置身何處，阡陌交通，其中往來男女衣著悉如日人，黃髮垂髻，怡然自樂。」（232）日本語訳【120】
- (13) 原文「並沒因三月的總統直選（可以自己一票投箱，這不叫當家做主，什麼才是？）而稍歇的國族認同，仍高唱入雲到彷彿恐怖情人一天要你照三餐說我愛你的「愛台灣」並溯及既往，一切不合建國神話的記憶、雜音皆被漠視、忽略、消音，這在台北早已開始，不尊重市民記憶的一「擅加修改公共空間名（儘管我和諸多人一樣並不喜紀念過往統治者的介壽路和無滋無味的新公園……之名），這種對歷史選擇性的紀念或忽略，我們還剩下什麼？又豈不重蹈「日清除清、國府清除日」之覆轍？這不是一個已當家做主的一時一地之人對歷史的健康心態吧？/我

妄想提出所謂不認同的自由，不愛這裡的，但基於各種理由（避秦的外省人，外配，外勞，貧賤不能移民的……）就不能待下來嗎，儘管他履行了公民義務，只因不願不能用單一的語彙和方式表達（或不表達）對在地的情感，便被再再質疑忠誠度，這，距離我認知的「民主國家」的定義還遠得很呢」（朱 2015：227）。

- (14) 胡蘭成 (1906-1981) は中国大陆出身の政治家、作家である。1950 年中華人民共和国の成立後「漢奸」とされ日本に亡命。1974 年台湾中国文化学院（現在の中国文化大学）に招聘され教授となるが、1976 年「漢奸」の身分から退去を命じられ、日本に戻る。胡蘭成的美学と政治思想については、王德威 2011「抒情與背叛：胡蘭成戰爭和戰後的詩學政治」『現代抒情傳統四論』（台北）国立台湾大学出版社、203-256 頁を参照。

引用・参考文献

欧文文献

- Gunn, Janet 1982 *Autobiography: Toward a Poetics of Experience*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Huyssen, Andreas 2003 *Present Pasts: Urban Palimpsests and the Politics of Memory*. Stanford, Calif.: Stanford University Press.
- Shih, Shu-mei 2007 *Visuality and Identity: Sinophone Articulations Across the Pacific*. Berkeley, Calif.: University of California Press.
- 2010 “Against Diaspora: The Sinophone as Places of Cultural Production,” In Tsu, Jing and Wang, David Der-wei (eds.) *Global Chinese Literature: Critical Essays*. Leiden; Boston: Brill. pp. 29-48.
- Thornber, Karen 2014 “Rethinking the World in World Literature: East Asia and Literary Contact Nebulae,” In Damrosch, David (ed.) *World Literature in Theory*. Chichester, England: Wiley-Blackwell.
- Tsai, Chien-hsin 2012 “The Heterotopic Agent in Chu T’ien-hsin’s “The Old Capital,” *Concentric: Literary and Cultural Studies* 38(2), pp.139-160.
- Tsu, Jing 2011 *Sound and Script in Chinese Diaspora*. Cambridge, MA: Harvard University Press.

和文文献

- 黄英哲 2005「歴史・記憶とディスコース：朱天心『古都』論」『言語文化』8（1）、29-54 頁。
- 清水賢一郎 2000「〈記憶〉の書」朱天心『古都』（清水賢一郎訳）国書刊行会。
- ジェイムソン、フレドリック 2012『未来の考古学 第二巻——思想の達しうる限り』（秦邦生・河野真太郎・大貫隆史訳）作品社。
- 朱天心 2000『古都』（清水賢一郎訳）国書刊行会。
- 2015『三十三年夢』（新北）印刻文学生活雜誌出版社。
- 芳賀徹 2019『桃源の水脈——東アジア詩画の比較文化史』名古屋大学出版会
- 星野幸代 2002「草木は語る城市の記憶——朱天心「古都」」『言語文化研究叢書』1、89-102 頁。

中文文献

- 王德威 2007『後遺民寫作』（台北）麥田出版社。
- 2011「抒情與背叛：胡蘭成戰爭和戰後的詩學政治」『現代抒情傳統四論』（台北）国

立台湾大学出版社、203-256 頁。

—— 2015 「華夷風起：馬來西亞與華語語系文学」 『中山人文学報』 38、1-29 頁。

史書美 2017 『反離散：華語語系研究論』 (台北) 聯經出版社。

朱天心 2002 (1997) 『古都』 (新北) 印刻文学生活雜誌出版社。

唐小兵 2002 「〈古都〉・廢墟・桃花源外」 『古都』 (新北) 印刻文学生活雜誌出版社。

黃錦樹 2016 『論嘗試文』 (台北) 麥田出版社。

楊如英 1998 「〈多重互文、多重空間— 論《古都》〉 中的文化認同與文本定位」

(http://www.srcs.nctu.edu.tw/joyceliu/TaiwanLit/online_papers/multispace.html、2020

年 12 月 25 日参照)

濱田麻矢 2009 「朱天心『古都』与胡蘭成的美学」 『励耘学刊(文学卷)』 9、157-166 頁。